

# メアリー・エレン・ビュート初期作品における視覚と音楽のシンクロについての研究

大阪芸術大学 映像学科 講師 大橋 勝

メアリー・エレン・ビュート (Mary Ellen Bute, 1906-1983) は、アメリカにおける先駆的なアニメーション作家であり、初の女性実験映画作家の一人でもある。その重要性にも関わらず、彼女についての研究は進んでいるとは言いがたく、特に日本においては実験映画の文脈でもアニメーションの文脈でもほとんど語られていない。ビュートの評伝としては決定版とも言える *Mary Ellen Bute: Pioneer Animator*, Kit Smyth Basquin, 2020 で、彼女の足跡を確認しつつ、特に初期抽象アニメーション作品とヨーゼフ・シリンガー理論との関わりを分析・考察した。

ビュートの関心は音楽の鑑賞時に浮かぶ視覚的イメージを表現することであり、このことを実現するために絵画、照明、カラーオルガンなどを学び、最終的にサウンド映画に辿り着く。この間の試行錯誤は彼女の映画作品に様々な影響を与えている。例えばトーマス・ウィルフレドのスタジオでクラヴィラックス(カラーオルガンの一種)を学んだ経験は、抽象的な光と色彩の扱いや、異なる像を重ね合わせるビュート独特の表現方法に繋がってくる。これらの変遷の中で、彼女にとって特に重要と思われるのはロシア出身の数学者・音楽理論家ヨーゼフ・シリンガーとの出会いである。

シリンガーは後のバークレー・メソッド、コード進行の元になる作曲理論を考案した人物で、芸術制作に数学的方法論を持ち込もうとした。特に人間の五感の順列組合せに対応する芸術形式を考察しており、その理論は大著 *The Mathematical Basis of the Arts* (芸術の数学的基礎) (1943) にまとめられている。本書第三部5章 *Production of combined art* (複合芸術の制作) では視覚と聴覚の相関関係が示唆されており、音楽を伴う抽象アニメーションが例として挙げられている。

シリンガーは音楽と抽象図形の運動を同期させるアニメーション作品を、1932年にビュートとの共同制作で取り組んでいる。 *Synchromy* (同期) と題されたこの映画は、ビュートにとっては初の映画制作でもあった。この作品は、シリンガー・システムによる幾何学的パターンとシリンガー作曲の曲を組み合わせたサウンド映画、抽象アニメーションであった。ビュートの映画処女作である本作は完成には至っていないが、 *Mathematical Basis of Arts* にはこの作品の一画面が掲載されている。つまり、ビュートの映画

第1作は、シリンガーの理論の実践として行われた側面があると考えられる。シリンガーは感覚の連合について様々な言及しており、“colored hearing”、“sound seeing”など視覚と聴覚を融合する芸術の形式について提案を行っている。

その後、アニメーションと実写の折衷的な技法と既存のクラシック音楽を組み合わせた抽象映画 *Rhythm in Light* (光のリズム) (1934)、 *Synchromy no.2* (シンクロミー2番) (1935) を完成させているが、それらはシリンガーの理論の直接の影響を示している。例えば、 *Synchromy no.2* の冒頭にはステートメント(作品解説)が付けられている。シリンガーの概念に通じる“SEEING SOUND”(目で見る音・音楽)という見出しの下、次の文章が示される。「音楽は耳を楽しませるだけでなく、目にも何かをもたらす。この映画は音楽が耳を通じて気分を作り出すように、目を通じて気分を作り出すように芸術家が構成したものです。あなたも音楽を聴いていると何かこのようなものが見えませんか。」この解説の背景には、デザインされた人間の眼と、その瞳の中にはサウンドトラックのパターンがアニメーションで波打っている。これら全て、シリンガーが唱えた視覚と聴覚の組み合わせによる芸術を、観客に向けて平易に説明したメッセージであり、それがそのままビュート作品の説明となっているのである。

また1930年代はじめにアメリカでも配給されていたオスカー・フィッシンガーの作品の影響も認められ、彼女自身そのことを認めている。フィッシンガーの *Studies* (スタディシリーズ) は、1929年から1932年にかけて制作された短編作品のシリーズで、音楽と抽象アニメーションとをシンクロさせたトーキー映画である。フィッシンガーの作業が、音楽の演奏音を逐次的に抽象図形の形・変化・運動などに翻案していることに対し、ビュートのそれは音楽を時間的展開の中で捉え、ヴィジュアルを音楽に対して対位的に配置させていることである。これはシリンガー理論の実践であり、ビュートが当初から抱いていた表現欲求の帰結でもある。素朴な表現の欲求、実はそれは近代美術の普遍的な問題意識と連動しているのであるが、理論と形式を得て、作品として結実する幸福な過程をメアリー・エレン・ビュートに見いだすことが、この調査を通じて確認できた。